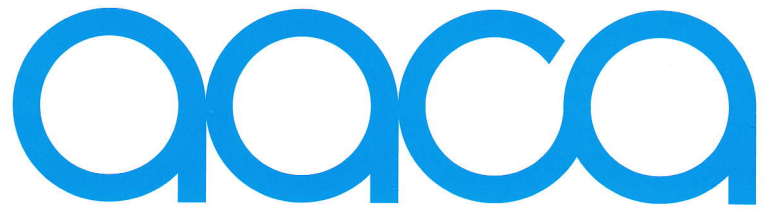


2019.10 no.85



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第2回街に飛び出す作品展

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	

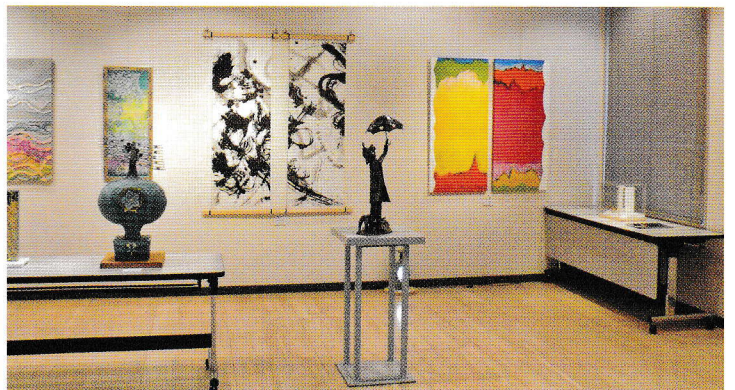
1. 安河内敦子
「シェルNo.5」
ガラス
w400×h250×d400
2. 山崎輝子
「兆」
皮革
w520×h620×d100
3. 井上勝江
「イヴの涙」
木版
w830×h550
4. 井上勝江
「春を待つ」
木版
w1500×h1500
5. 重田恵美子
「TOMORROW-希望」
真鍮・ステンレス
w450×h700×d450
6. 吉野ヨシ子
「想いの詩」
ステンレス・鉄
w1820×h2500×d800
7. 小泉伸子
「絆」
染色
w900×h900×d150
8. 白野順子
「九寒溝・黄龍の思い出」
シルク・コットン
w630×h940
9. 鈴木法明
「雨あがる」
チタン
w450×h600×d450
10. 小野寺恵美
「CLAY SPIRAL」
陶土
φ300~500 h500
11. 横山 徹
「環」
インド黒みかげ石
w670×h650×d550

“街なかミュゼ活動”は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動としてますます広がりを見せて展開しています。

平成27年10月24日(土)～11月1日(日)建築会館1階建築会館ギャラリー・イベント広場において「第2回街に飛び出す作品展」を会員及び一般から募り、10月26日「街なかミュゼ活動」作品選考会として開催いたしました。

応募申し込み者22名作品28点をaaca推薦者選考委員会: 梶屋正選考委員長(鹿島彫刻コンクール幹事長・アートプロデューサー) 米林雄一選考委員(東京芸術大学名誉教授・彫刻家) 山極裕史選考委員(三菱地所設計株式会社・建築家) 平山健雄展覧会部会長により物件ごとに推薦作品を複数推薦しました。最終選考はスタートコーポレーション株式会社とオーナー様で行いました。各作品の前には作者が立ってオーナー様に作品を見ながら作品コンセプトをはじめ素材の特徴や作意などの説明をしていきます。そこでは作品の持つ力と共に、作者のプレゼンテーション力が発揮される場となっています。その中からスタートコーポレーション株式会社とオーナー様がaaca推薦者選考委員会のアドバイスを受けながら11作品が選定されました。

(実行委員長 安河内敦子)



CONTENTS

■時代の華一輪

今につながる様々な出会い 中野恵美子 4

■会員活動レポート

神保町のギャラリー『art gallery & Legion』の試み
～「パブリックアートってなに？」～パブリックアートと地域デザイン展

三上紀子 6

刺繍とわたし 高須好子 7

日本の建築・芸術・伝統文化 鍛冶加緒里 8

ポルトガル「アズレージョ・ステンドグラス・建築」の旅
山崎和子 9

■第3回 BOX 展—30cmx30cmx30cmの空間を遊ぶ—

開催報告 山崎和子 10

審査講評 南 三一郎

受賞作品 11

出品作品 12

最優秀賞を受賞して 川口 満 15

■第196回 aaca フォーラム

日本の伝統工芸を海外はどう見ているか 堀井素史 16

■表彰委員会だより

第28回 AACA 賞受賞者紹介のつどい開催報告 可児才介 17

■展覧会委員会だより

第1回「街に飛び出す作品展」設置作品見学会 安河内敦子 18

■調査研究委員会だより

「地域風土に根ざした文化芸術活動」分科会報告 七字祐介 20

「宇都宮」マニアックな魅力の発掘とその楽しみ方 藤原宏史 21

全体から部分へ、部分から全体へ —建築的価値の志向変容
中川 武 22

■広報委員会だより

十日町研修旅行記～「段十ろう」から「縄文土器」まで
三上紀子 23

■事務局だより 24



▶▶ 10



▶▶ 16



▶▶ 17



▶▶ 18



▶▶ 23

今につながる様々な出会い

織造形家
日本建築美術工芸協会監事
中野恵美子

今年の3月に京橋の「アートスペース繭」で「インカの末裔の織物」展を行った。33年前にアンデスをアメリカ人のトレッキングツアーに参加してテント生活をしながら村人の織物を訪ね歩いたことがある。その時に入手した織物を初めて展示した。それに先立つ2週間前に1通のメールを受けた。旅行の際にお世話になったクスコの旅行代理店のイギリス人夫妻の息子マキシム・ホランドからであった。テントを設営していた時に周囲をうろちょろしていた男の子にチョコレートの包み紙で鶴を折ってあげた。その子が弟のマキシムにそれを渡し、彼がその折鶴に興味を持った。2年後に又アンデスに行き再会した時に、英語の折紙の本と色紙を手にしながらか「折紙を教えて」と私の元に来た。本を見ながら折ってあげた。3度目のアンデス行きで又会ったが、その時には樹木が描かれた大きな画用紙に折紙の動物、鳥を貼りつけた彼の作品を見せてくれた。突然のメールはその彼からの訪日の知らせだった。展覧会と時期が重なっていたのでギャラリートークの日に会場に来よう伝えた。

当日、今は30代後半の元折紙ボーイが現れた。何という偶然の一致、約30年ぶりの再会であった。感激した。彼は一羽の折鶴により折紙、アート、日本文化に興味を持ち始めたという。そして現在はアート関係の活動をしている。まさにアンデスの大地の女神パチャママの引き合わせとしか思えない。

そもそも私がアンデスの織物に興味を持ったのは鎌倉近代美術館で行われたペルー、リマ市にある天野博物館（現在は天野プレコロンビアン織物博物館）の「アンデスの染織展」を見たことに始まる。スペインによる征服以前のアンデスには紀元前から様々な文明が存在し、各時代の多様な染織品が遺跡から発掘されている。その織物の素晴らしさに衝撃を受け、自分がやっているのは織物とは言えない、どんな空気、どんな環境で作られたのだろうか、いつかは行ってみたいと思うようになった。東京造形大学卒業後のことである。

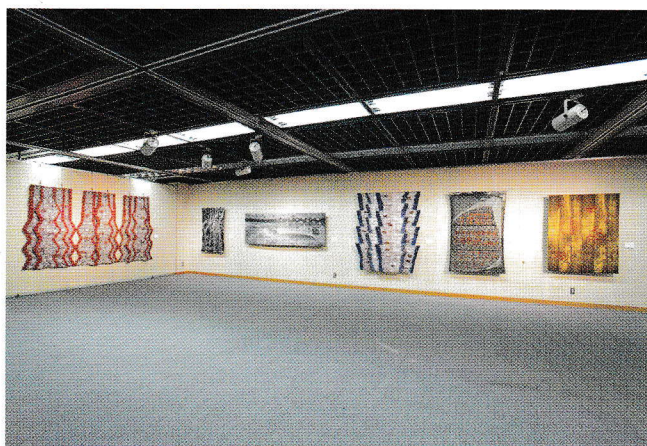
東京造形大学には28歳の時に入学した。そして戦後初め



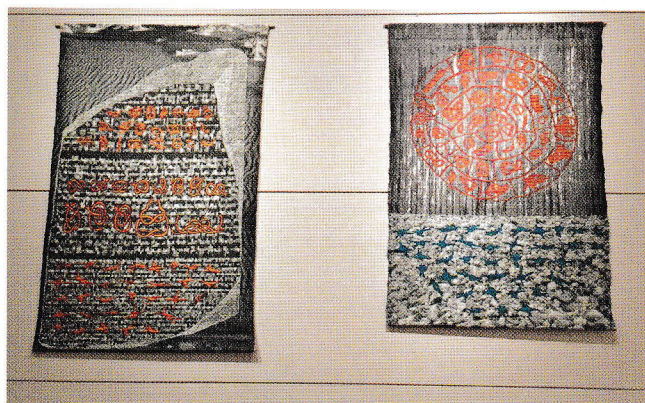
かつてのマキシム (写真中央) 1986.5 ペルー



現在のマキシム (写真右) 2019.3 アートスペース繭



「ファイバーアートの7人」2018 京都文化博物館 中野恵美子の作品 (2008~2018)



「ジャカード2x2 モントリオール：東京2018」
2018 京王プラザロビーギャラリー 左” Himoglyph I” 2017 ジャカード織 (手織)
右” Himoglyph II” 2018 ジャカード織 (手織)

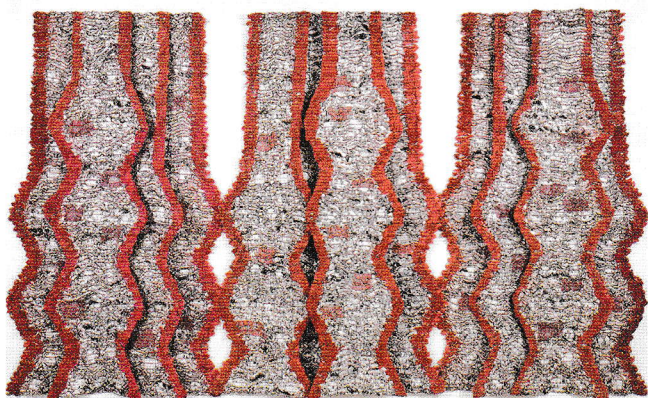
て女性でクランブルック・アカデミー・オブ・アート（略：CAA/ミシガン州デトロイトにある美術系の大学院大学）に留学した藤本経子先生に1、2年生の時に指導を受けた。3、4年生では日本にファイバーアートを上陸させた一人である嶋貫昭子先生に教わった。東京造形大学はバウハウスのデザイン教育を取り入れた桑沢デザイン研究所の創業者桑沢洋子先生が設立した大学である。そのためかバウハウス関連の授業も多かった。「エレメントとオーダー」といった構成の用語も新鮮であった。そのような環境のもとで、織のできる表現をしてみたいと「織造形」に取り組み始め、卒業後は日展、日本現代工芸美術展に出品していた。作品が表層的になったなと迷い始めた頃、当時全米のファイバー界を牽引し機関車的存在であったCAAのゲルハルト・ノデル教授に日本で出会った。それがきっかけでCAAに留学した。43歳の時だった。藤本先生からCAAのことはお聞きしていたので迷いはなかった。しかし行って見たら技術指導は一切なくクリティックと称する作品についての批評や議論で授業が進んでいく。当時日本ではどちらかという技法の展開が主で作品について論じることは少なかった。まして英語である。ついていくのがやっとならであった。「あなたにとってアートとは？ デザインとは？」という質問も度々あった。そのようなことからファイバーアートの始まりはいつ？どこで？と疑問を持つようになった。いつかは行きたいと思っていたアンデスに行ったのもCAAの夏休みであった。

世界の建築、デザイン界に大きな影響を与えたドイツのバウハウスは今年で開校100年目にあたる。織工房については日本ではあまり知られていないが、開校時（1919）から閉校時（1933）迄存続し、クレーも織工房で形態論を教

えていたという。また当時ベルリン博物館に収蔵、展示されていたアンデスの染織品が授業の手本だった。それらのことが書かれた学位論文でもある1冊の洋書に出会った。そしてファイバーアート及びテキスタイルデザインの始まりがバウハウスにあったこともわかった。バウハウス、アンデス、テキスタイル、ファイバーアートと自分がこれまで関心のあったものが全部繋がり驚き、翻訳講座を通信教育で3年間受けながら翻訳に取り組み、『アンニ・アルバースとアンデスの染織 - バウハウスからブラック・マウンテンへ-』ヴァージニア・ガードナー・トロイ著 中野恵美子訳を桑沢文庫から2015年冬に出版した。

アンデスのトレッキングの際にガイドをしてくれた女性、ニルダ・カジャナウパとはその旅の10年後にカナダ、バンクーバーにおける世界織物会議で再会した。立派なビジネスウーマンになっていた。アンデスの織物が観光客のために土産物化し質が落ちたのを嘆き、「自国のカルチャーは自分達で守る」という主旨のもと伝統織物センターを作り、昔ながらの植物染めを復活させ村人にその糸を渡して良質な織物を織らせそれを販売している。その「自国のカルチャーは自分達で守る」という言葉に教えられ、自分も「自分達のフィールドは自分達で」という気持ちで、100人の作家による「テキスタイルアート・ミニアチュール展」を2010年に仲間と立ち上げた。「若い人に発表の場を、ベテランと出会える場を、一般の方にテキスタイルの世界を知ってもらいたい。」という思いで始めた。今年で6回目だが、昨年は韓国・ソウルで「韓日交流展」を、今年は伊丹市立工芸センターで「日韓交流展」を開催するまでになった。

様々な出会い、つながりのおかげで現在の自分がある。色々なご縁に心から感謝する。



「FIBER FUTURES: Japan's Textile Pioneers」2015 パリ日本文化会館「連なり」(Cambodian letters)



「テキスタイルアート・ミニアチュール 6 日韓交流展」伊丹市立工芸センター 2019.7

会員活動レポート

神保町のギャラリー『art gallery & Legion』の試み ～「パブリックアートってなに？」 ～パブリックアートと地域デザイン展



レジオン・コンサバティブ(株)代表取締役
日本建築美術工芸協会会員

三上紀子

昨年夏、神保町のさくら通りに面した一角に、art gallery & Legion (アートギャラリー アンド・レジオン) を開設しました。これまで建築家として住宅や医療施設・保育園等の建築デザイン・設計監理業務に携わってきましたが、これまでの業務の中で、建物が竣工した際に施主から「この空間に合うアートを探してきてほしい」と頼まれる機会が幾度とあり、その度にギャラリーや作家を訪ね、建築空間とアート作品とをコーディネートしてきました。そうした体験から「建築とアートを結びつけることができる場があれば」と思い開設したのが『art gallery & Legion』です。

『art gallery & Legion』では、「暮らしにアートを」というコンセプトの下、<アート><建築><工芸>の3つをテーマに作家と作品を紹介しています。なかでも空間と作品との関わりを大切にしており、両者が互いに高め合い融合することをひとつの目的としています。

そしてこの5月に企画開催したのが、パブリックアートをキーワードとしたイベント「パブリックアートってなに？」～パブリックアートと地域デザイン展～です。

当イベントを立案した背景に2つの理由がありました。近年“パブリックアート”という概念が「公共空間に置かれたアート」というこれまでの定義よりもさらに広がりをもちはじめ、「生活空間と共にあるアート」といった広義な概念へと拡がりつつあります。加えて、日本各地で開催されている芸術祭にもみられるように、現代ア

トが地域コミュニティの活性化に果たす役割にも大きな注目が集まっています。そこで今一度、「パブリックアート」について私たちに再考してみる必要があるのではないかと思います、当企画を立ち上げた次第です。

プログラムは大きく次の3つより構成しました。専門家による「クロストーク」、参加者とともにパブリックアートについて考える「交流会」、そして「学生によるプレゼンテーション」です。

クロストークは4回シリーズで行いました。

第一夜は「映画の中のアート、日常の中のアート、ストーリーとしてのアート」

第二夜は「日本における"1% for ART"の可能性について～韓国、台湾の法制化に学ぶこと」

第三夜は「生活空間とアート：～いろ、かたち、素材」

第四夜は「都市/建築“場の意味を高める ART”の可能性について」です。

「学生によるプレゼンテーション」は、日大創生デザイン学科のデザインスタジオⅢで行った演習<アートによる地域と暮らしの活性化>の課題作品を展示することによって、地域デザインの側面からもパブリックアートについて考える機会を提供しようと考えました。また神保町の方々にオーディエンスに招き講演会を開催。“神保町のまちへのアートの提案”についてのまちの人からの忌憚のないクリティークに学生達も大いに刺激を受けたようでした。

最終日は、参加者が集うクロージングパーティを催しました。全員一品持ち寄りの手作りパーティです。建築家、作家、デザイナー、学生、市民…。それぞれの立場を超えた交流と多様な意見がクロスする場となりました。

「これからのパブリックアートとは？」と広義に捉えると、様々な可能性が見えてきます。<パブリック>の真の意味とは？人々がアートに期待しているものってなに？、日本独自のパブリックアートの在り方とは？…このイベントを通して交わされたディスカッションを後日レポートとしてまとめたいと考えています。

“暮らしにアートを” “日常にアートを” “地域にアートを”。

現代の生活空間をより楽しくより豊かに。現代社会におけるアートの役割について考えるべく、これからも建築とアートを結ぶ場を提供していきたいと思っています。



展覧会会場の様子。さくら通りに面したギャラリー。ガラス貼りで、道行く人からよく見えます



最終日のクロージングパーティ。建築家、作家、デザイナー、学生、市民の交流と多様な意見がクロスしました



第一夜は aaca 会員で美術家の松田静心氏と建築家で木造作家の長田淳一氏に登壇いただきました。映画のセットのみならずストーリーの一部として登場する松田氏の作品、ランドスケープの枠を超えて地域の生活や歴史をも取り込んだ長田氏の作品、いずれもこれからのパブリックアートのかたちを予感するものです



第二夜では、aaca 会員でアートディレクターの小野寺優元氏から新しいキーワード、「AI」ならぬ「AI (Art Impact)」が提示され、現代社会でアートが果たす役割への期待をオーディエンスと共有しました

第三夜では、インテリアコーディネーターの江口恵津子氏と若手彫刻家の天野浩子氏に暮らしとアートの可能性について語っていただきました。天野浩子氏の“put put put”は、日常空間の中に小さなアート作品があることによって起こる生活の変化や一般生活者の意識の変わり様など実践に基づく大変興味深いプロジェクトです



刺繍とわたし

刺繍作家
若草会会員
日本建築美術工芸協会会員
高須好子



父はおもちゃをつくる人でした。父の描いたハップバーンやエリザベス・テイラーの鉛筆画は子どもながらにすごい!と思ったものです。母は手仕事の好きな人で、洋服も浴衣もセーターもいつも手づくりしてくれました。そんな両親のもと、わたしも絵が描きたくて女子美付高へ、日本刺繍がやりたくて女子美短大刺繍教室へ、もっと刺繍を学びたくて刺繍屋「かな森」に弟子入り。結婚後、子育てしながら今に至るまで職人です。

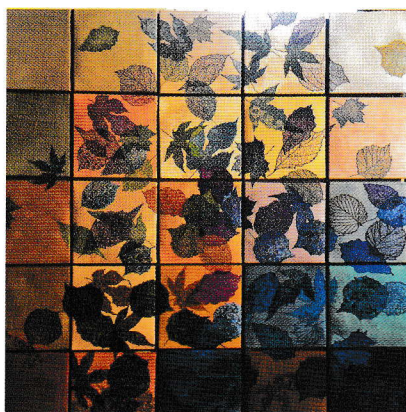
2010年「文科省、服飾文化共同研究における江戸小袖復元模作プロジェクト」の刺繍を担当。先人の技術の高さに圧倒されました。数百年たっても、色はあせたものの絹糸の光は変わらず、刺し込んだ糸の塊は強いものでした。

2016年、館鼻則孝氏プロデュース、パリ・カルティエ財団での文楽公演の衣装は上原利丸先生が手がけた美しい染色の衣装でした。日本刺繍を世界に発信する機会はそんなにあることはありません。心を込めて美しい染めを引き

立てられるように努力して刺しました。

こんな中、自分の作品づくりにおいては若草会展(女子美刺繍同窓生の会)、グループ展、企画展などに参加、2011年ごろ藤田嗣治のタイル風に描かれた"小さな職人たち"に魅せられ、たてもとの共存、タイルを意識した作品を手がけるようになりました。最近のテーマは"ひかり"糸や布を自分で染め、自分の色、空間、リズム感を大切にしています。

前回の「街に飛び出す作品展」では3作品設置していただきました。安河内さんの手とり足とりのご指導には感謝しかありません。そしてaacaの会員で若草会の先輩でもある品川未知子さんに声をかけていただき、aacaとの有難いご縁をいただきました。いろいろな作家さん方との出会いは勉強になることばかりです。これからも手の動く限り、目のみえる限り大好きな刺繍に思いを込めて、精進していこうと思っています。



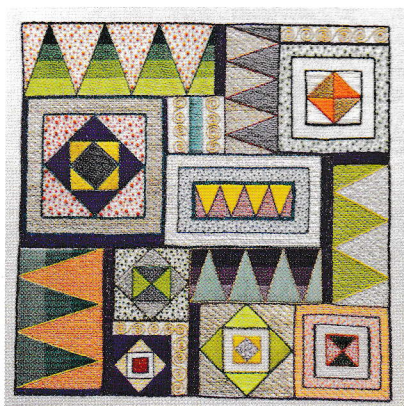
ひかり



ひかり(部分)



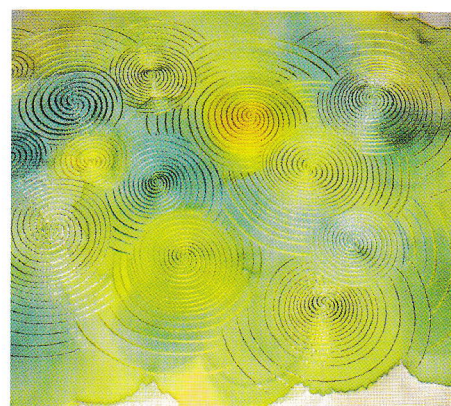
奏(かなで)



ミュシャが好き!



ひかり...フリーダム



ひかり...晴

日本の建築・芸術・伝統文化

G-cology
パフォーマーアスリートセカンドキャリア協会
日本建築美術工芸協会会員
鍛冶加緒里



【日本の建築・芸術・伝統文化】

近年、様々な外国人を日本で見かけるようになり、異国文化も多様化しているこの頃ですが、日本が世界に誇れる伝統文化を、改めて日本人が再認識し、海外へ誇れる日本を世界へ発信して行きたいと思うようになりました。私は、これまで、映画、映像、舞台イベント企画制作、芸能プロダクション、SNS コンサルタント、インフルエンサー育成、女性支援、プロアスリートのセカンドキャリアなどの事業の傍ら出会った、「日本の伝統文化」それはギネスに認定され、CIA 公式サイトにも掲載されているが意外に認知されていない「日本が世界最古の国家である」という事実。脈々と受け継がれて来た、森羅万象に魂が宿る神道の思想や自己規律としての武士道の精神、長い歴史の中で生まれたこれらの価値観。そこから生み出される「モノづくり」「コトづくり」の技術、妥協のない職人気質を目の当たりにしました。

そこには、この現代を生き抜く私達が改めて再認識すべき「豊かさ」というヒントがあるのではないかと。そんな活動の中、プロアスリートのセカンドキャリア支援しているパフォーマーアスリートセカンドキャリア協会 代表 神戸豊さん、そして『現代における、文化・芸術・芸能の必要性』を提唱している“G-cology”代表 真鍋徹也さんと出会い、活動に参加しております。“G-cology”代表 真鍋徹也さんは、設立 33 年を迎える和太鼓のプロ集団“太鼓集団天邪鬼”の現役奏者です。

“G-cology”の理念である『文化から日本を豊かに。日本から世界を元気に』を掲げ、“文化人”が活躍できる世の中を作る、先人達の確かな技術や精神の上に、新しい感覚を盛り込むことで、来るべく次の時代へ必要とされ継がれる仕掛け作りをしています。

【そして、今私が考えること】

「芸術」「建築」「芸能」「神道・武士道」など、「無形」「有形」に関わらず、そこには「確かな感動」を引き継いだ「人」がいます。人の手で人の心に感動を与え続けることこそ、たとえ AI 時代が訪れたとしても「人」が必要とされる理由ではないでしょうか。そこには語り継がれ洗練され新たに発生する「文化」が存在するはずで。伝統文化”を体現している職人・真の芸能人達、高い水準で感動を与え続けるアスリートやパフォーマー達。彼らには『人の心を突き動かす力』があります。彼らの表現を youtube で見ることも可能です。VR で見ることもできるでしょう。しかし、私を知る限り、リアルな「場」で経験することを上回る”感動”はなく、“文化”と”人”が交流する「場」として、日本が誇る偉大な「建造物」こそ大きな価値があると考えております。aaca との出会いから、皆様が手がけられてきた素晴らしい建築物や芸術、地域環境の「場」には「感動」を生み出す力が溢れています。その「場」に「動=和楽器、パフォーマー」との融合で新たな息吹“感動”を伝え、“人”が集まり、伝統文化・継承になる。きっと、そこには多様な人々の笑顔があり、豊かな時が流れることでしょう。長年”芸能の世界”で培ってきたプロ達を存分に活かし、「静”芸術・建築と、「動”芸能・神道・武士道の融合。今こそ『文化のアップデート』への挑戦、現代・未来に継がれる一翼を志一つに邁進して参ります。また大人達がこのように挑戦していく姿こそ、次の時代を生きねばならない子供たちに勇気や希望を与え、日本が再び心、豊かになることの「礎」になれましたら幸いです。最後に、会員の一員となり、皆さまと共に活動できますことを感謝申し上げます。ご拝読いただき、芸術・建築と融合×コラボの機会がございましたら、是非お声かけ下さい。



獅子舞



和太鼓



PASCA イベント



和太鼓

ポルトガル「アズレージョ・ステンドグラス・建築」の旅

日展会友
現代工芸芸術家協会本会員

山崎和子



ガラス作家で aaca 理事平山健雄氏のコーディネートによるポルトガルの旅（4月22日から5月1日）に参加しました。4月22日、成田発パリ経由でポルトガルの首都リスボンに夜22時過ぎに着き、ホテルに直行しました。翌日は専用バスで大学を中心に発展した文化都市コインブラへ。途中、古代ローマ都市があったコニンブリカの遺跡に立ち寄りましたが、広大な遺跡に驚き、アズレージョ（タイル）が残っていたのにも感動しました。コインブラでは、美しいアズレージョとパイプオルガンが素晴らしいサン・クルス修道院や大聖堂を見学しました。さらに13世紀世界最古のコインブラ大学の礼拝堂を見学し、バロック装飾の美しい図書館では蔵書、内装を維持するためにコウモリが飼われている事に驚きました。

2日目も専用バスで、ギマランイス城、ロマネスク様式のサンミゲル教会、サン・フランシスコ教会を見学し、そして祈りの町ブラガへ。ブラガでは、小高い丘の上にあるキリスト教の聖地ボン・ジェズ教会にある18世紀に建てられたバロック様式の長いジグザグ階段が珍しかったです。夜はポルトの町のレストランでリゾット、エビ、イカ、ジャガイモのスープなどのポルトガル料理を美味しくいただきました。

3日目は終日ポルトの街を散策。美しい本屋レロ・イ・イルマオンは、ハリーポッターに出てくるような内装で、観光客でいっぱいでした。市内最古12世紀ロマネスク様式の教会大聖堂は、ドウロ川を見下ろすように建てられて回廊のアズレージョがとても素晴らしかったです。次にポルト経済の中心地だったボルサ宮殿や金泥細工の装飾が美しいゴシック様式のサン・フランシスコ教会を見て、昼食後は日本でも有名なポートワインのラモスピント・ポルト酒造を見学して試飲をしました。

4日目は専用バスで、美しい町オビドスへ。途中、水と緑の町トマルでポルトガル建築の粋が集約されたキリスト教修道院、ノッセ・セニョーラ・ダ・コンセイサオン礼拝堂や15世紀ゴシック様式のサン・ジョアン教会を見学し、バターリャの聖母マリアに捧げられたバターリャ修道院はステンドグラスがとても綺麗で

した。次に見たポルトガル国王を象徴するアルコバサ修道院は大きな厨房の煙突が印象深かったです。宿は城壁に囲まれたオビドスの可愛いホテルで、夕食はお城の中にあるレストランでコース料理を美味しくいただきました。

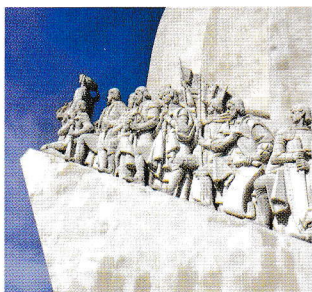
5日目、オビソスのアズレージョの美しいサンタ・マリア教会、美術館を見学後は、レストラン、ショップが並ぶ、長く続く石畳の細い道を散策して、お土産を買い、昼食後専用バスで世界遺産の町シントラへ向かいました。王家の夏の離宮レガレイラ宮殿は、豪華なお部屋があり、アズレージョも綺麗で、ここも厨房の煙突がすごかったです。見学後専用バスで首都リスボンに向かいました。

6日目は、リスボン市内にある世界遺産のベレンの塔、ヴァスコ・ダ・ガマがここからインドへの航路に船出した記念に建てられた発見のモニュメントを見て、ヴァスコ・ダ・ガマが持ち帰った富で建てられた世界遺産のマヌエル様式を代表するジェロニモス修道院には、ヴァスコ・ダ・ガマの棺も安置されていました。夜は楽しみにしていたファド酒場へタクシーで行き、お食事付きで、ポルトガルのギター演奏と3人の歌手の歌声が素晴らしくて感動しました。

7日目に訪れたリスボン市内のカルモ教会は、1755年のリスボン大地震により大部分が破壊されて、再建されないまま残っていたのが印象的でした。日本の天正遣欧少年使節が訪れたサン・ロケ教会は、ステンドグラスがとても綺麗でした。そして市内のケーブルカーに乗ってサン・ペドロ・デ・アルカンタラ公園でのんびりした後、ポルトガル名物のイワシの缶詰などを買い、ショッピングを楽しみました。

最終日は、「泥棒市」と言う蚤の市に行きましたが、とても広く、色々な品物が出ており、私はガラスの瓶などを買い求め、そしてリスボン空港からパリ経由で帰途につきました。今回は、見学する建物がいっぱいあり、物価も安く、食事も魚介類が豊富で美味しく、日本人にはとてもいい国だと思いました。楽しい旅でした。

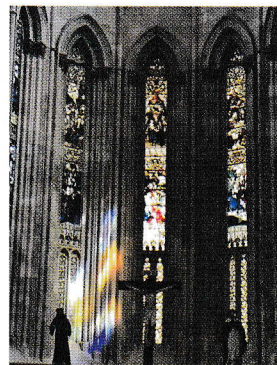
コニンブリカの遺跡



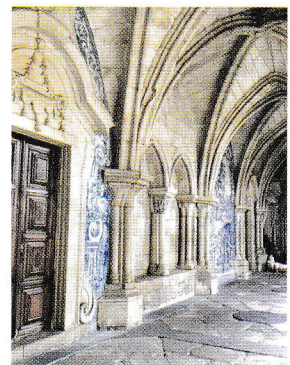
発見のモニュメント



ジェロニモス修道院



バターリャ修道院



ポルト大聖堂の回廊

第3回 BOX 展 —30cmx30cmx30cm の空間を遊ぶ—

開催報告

BOX 展実行委員長 山崎和子

会 期：2019年7月2日（火）～8日（月）

建築会館1Fギャラリー

出品者：39名（会員21名・一般18名）

作品数：43点（会員24点・一般19点）

来館者：220名

審査委員長：南 三一郎

審査委員：可見才介・坂上直哉・本 耕一・廣角京一
小谷純造・立石博巳・飯田郷介・石田真人

多数の作品数で大変変化に富んだ楽しい遊びの空間の展覧会が出来ました。

表彰式・レセプションに岡本会長はじめ多数の参加者で盛り上がり、オーデエンス賞は203票の投票がありました。協賛は昨年より2社増えて株式会社クサカベ・株式会社文房堂・光ステンド工房・株式会社名村大成堂・株式会社アクエリアスで副賞も12色絵具、筆セット、スケッチブック、キャンバス、フランス製ガラス見本のある表彰式でした。

今回はガラス見本をレセプション参加賞として皆様にお

配りしました。

展覧会終了後来年も楽しみに参加したいと嬉しいお言葉を頂きました。

第4回BOX展2020年6月5日（金）～11日（木）4日搬入、12日搬出に決定しました。

最優秀賞	川口 満	（一般）	『記憶の街』漆
優 秀 賞	川口知子	（一般）	『Urban Space』革
	郡 和子	（一般）	『天空』ガラス
佳 作	横沢和則	（一般）	『Cheese○House○Mouse』 硬質・発泡アクリル・ぬいぐるみ
	池田嘉文	（会員）	『エンドレス ドリーム』ブロンズ
	神 まさこ	（会員）	『Lets Dance』木（炭）錫
	松本治子	（会員）	『矢の先をハート♡にかえて』 大理石 セメント
特 別 賞	久常久美子	（逝去）	『歩I』針金 紙ネンド アクリル糸
オーデエンス賞	中川広葉	（一般）	『金属昆虫』 ステンレス コールテン銅

審査講評

審査委員長 南 三一郎

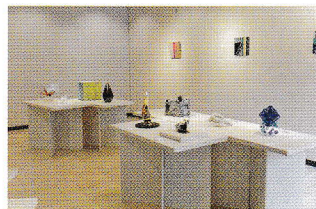
BOX 展は30センチ四方の空間の中に、濃密な自己表現を結晶化する試みです。3回目となる今回も43点の作品が揃いました。屋内展示と言うこともあり、比較的自由に素材を選択することができ、陶器やガラス、金属などに加え、テキスタイルから皮革、紙、漆、石膏など、多彩な素材のユニークな力作が並びました。審査は前回にならい、独創性50点/技術的完成度30点/空間との応答性10点/その他特筆すべき加点10点/合計100点を各審査委員が配点し、その合算点を参考に7点の入賞作を定めました。評価の配点については、空間応答性により加点をと言う意見も

あり、今後基準の再検討の機会を持ちたいと考えますが、配点表による数値化によって、審査はかなり公正でかつスムーズに行われたと思います。

最優秀作の川口満氏の作品「記憶の街」は、漆という素材を用い、都市の印象を極めてシャープに表現している点が評価され、高得点で選定されました。佳作の各作品も技法を駆使し、独自の世界観を表現している点が評価されています。特別賞は本年4月に逝去された久常久美子氏の作品に贈られました。



会場風景



会場風景

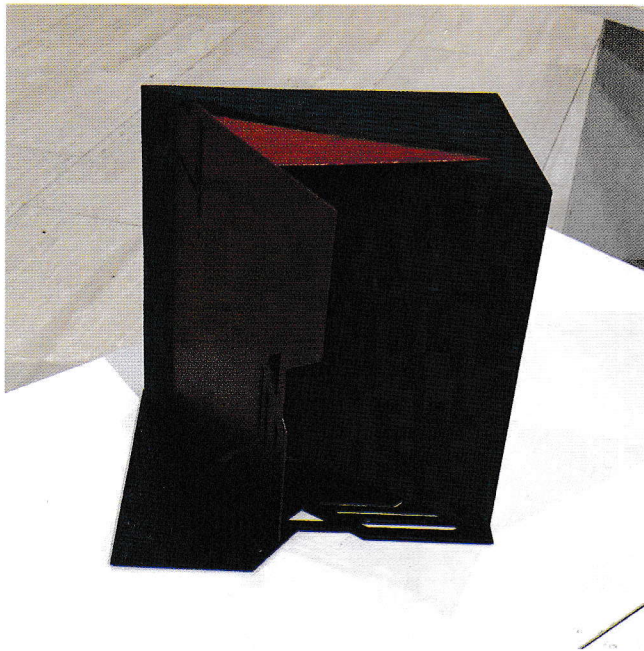


表彰式



オープニングパーティー

●最優秀賞



川口 満 (一般) 記憶の街
漆
うつりゆく街の表情を表現してみました。

●優秀賞



川口知子 (一般)
Urban Space
革
環境に優しい事柄等を頭
におきながら、近未来的
な発想の都市を想像し、
製作してみました。



郡 和子 (一般) 天空
ガラス
どこまでも、どこまでも、
深く明るい透明な空の奥
の奥。遠く輝く清ら
かな世界への希求。

●佳作



神 まさこ (会員)
Let's Dance
木 (炭) 錫
動きたい、歩きたい、踊りたいという思
いをどこまで静物の中で表現できるの
か?生木を彫るということだけでなく、火
によって燃やされ違う物質になった時、
それでもその思いが出さるかどうかに挑
戦しました。



池田嘉文 (会員)
エンドレス ドリーム
ブロンズ
エンドレスドリーム。
絶望した時に例え夢であっても希望を抱
き前に進みたいと思います。
終わりの無い夢でありたいです。



松本治子 (会員)
矢の先をハート♡にかえて
大理石 セメント
13世紀のイタリアの教会のモザイク画の
一部を模写しました。原図は十字軍のコ
ンスタンチノーブル侵略図ですが、21世
紀に生きる私は、尖った矢先を♡に置き
換えて、侵略ではなく、世界の友好と平
和を願っています。



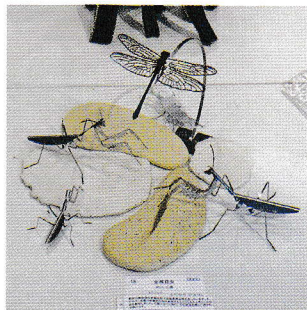
横沢和則 (一般)
Cheese House Mouse
硬質発泡アクリル+ぬいぐるみ (オリジ
ナル)
来年はねずみ年です!誰もが一度は思い
描く「お菓子の家」は、ねずみ達にとっ
てはチーズの家かもしれません。見てく
ださる方に、ひとときの癒しを感じてい
ただけると嬉しいです。…食べ過ぎ注意
です!

●特別賞

久常久美子 (逝去) ^{アユミ} 歩I
針金、紙ネンド アクリル糸



●オーディエンス賞



中川広葉 (一般) 金属昆虫
ステンレス コールテン鋼
普段は無気質な金属材料で自動車部品等造って
います。その中で、金属で有機的な物を表現する
とどうなるかと考えこの作品を製作しました。ご覧
になった時に、その昆虫を感じて頂ければ幸いです。

出品作品



神 芳子 (会員) Sen Kai
籐



妙川幸子 (一般) 実り
石膏 顔料 純金箔



久野博美 (一般) 春の天使
布フェルト 樹脂 ししゅう糸



五十嵐通代 (会員) 雪どけ
ウール ガラス糸 綿糸 ステンレス線



吉田 実 (会員) 情報は何kg?
紙 ヒモ



中島クミ (会員) One Foot Garden
ガラス 黒寒水石 木



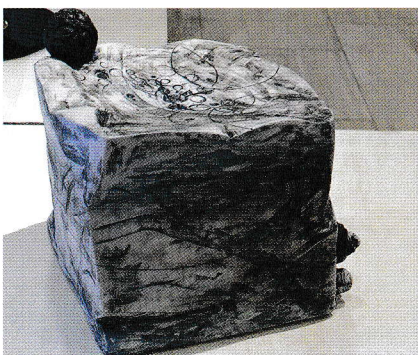
高須好子 (会員) 晴
布地—絹 糸—絹糸、綿糸、麻糸、金銀糸、ラメ糸



須齋尚子 (会員) Ascension
陶土



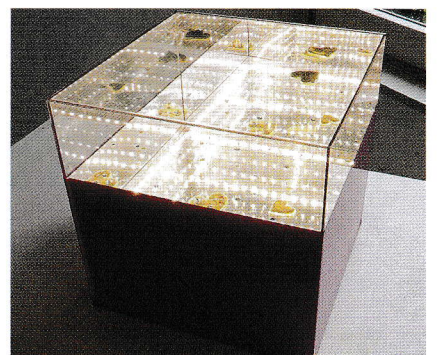
大谷美智子 (一般) 根っこ
タイシルク テグス



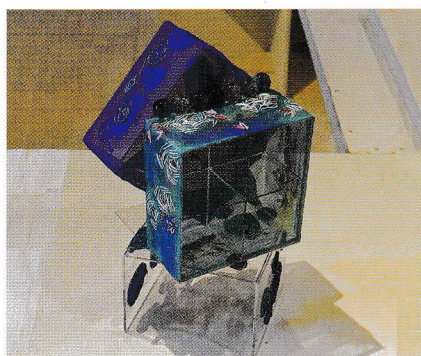
二木啓子 (一般) 覚醒の時
陶



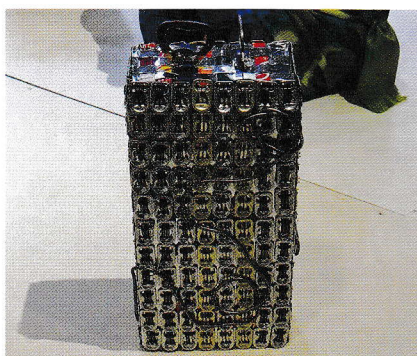
中野敦子 (一般) 折り紙の鶴
生地—シルク 糸—金色 金箔 和紙



上江洲牧子 (会員) 思い出 2
ガラス 木 金箔 アクリル LED ライト 鏡



品川未知子(会員) お花畑の小物入れⅡ
絹オーガンジー 絹糸 アクリル板 ビーズ



西田和恵(一般) Opener(栓抜き)
アルミニウム つり用糸(テグス) マクラメ結び糸



野口真理(会員) つちの虫
陶土 粉漆 金箔・玉虫箔等 釉薬 カシュー (作品協力) 有限会社大竹製作所 中川広葉氏(虫オブジェ:ステンレス)



齋藤卯乃(一般) 日本漆



今井文子(一般) re-born 一旅は続く—
正絹 mixed-media



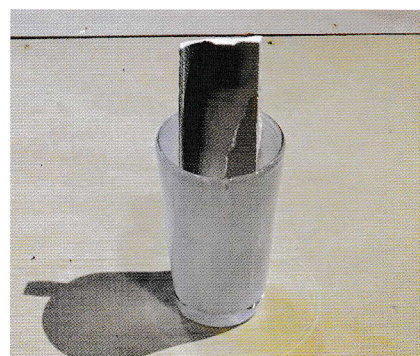
佐藤静子(会員) 桜紋揚羽蝶図
絹



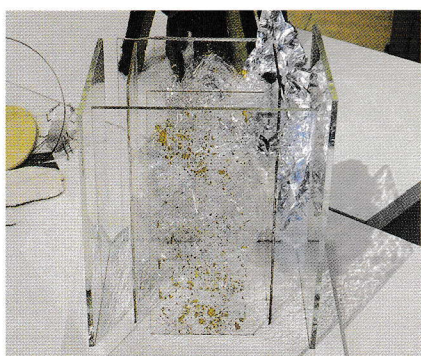
三上紀子(会員) 時のはざまに
木 アクリル



升方允子(一般) The air
ガラス 石膏



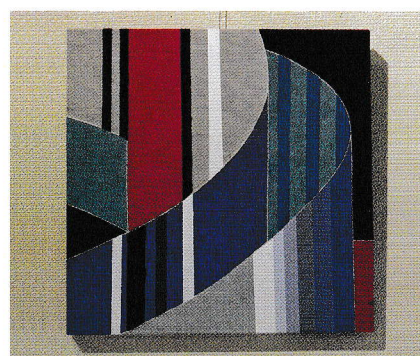
升方允子(一般) Early Blue 3
ガラス 石膏 水彩



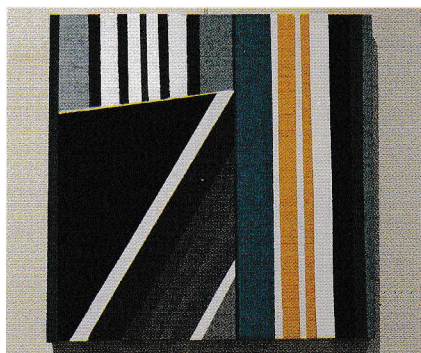
平山健雄(会員) クリアランス・クリアー
ガラス 木 サランラップ アルミホイル



中嶋クミ(会員) Pax Ⅱ
ガラス



山崎和子(会員) Some Time — A
染 絹布地



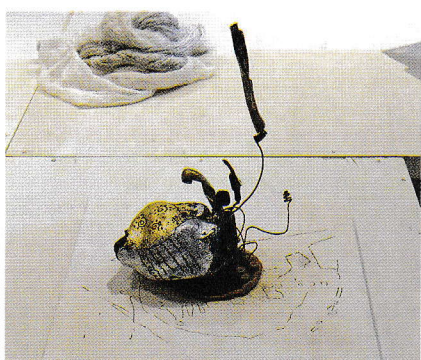
山崎和子(会員) Some Time - C
染 絹布地



鈴木法明(会員) 頭脳集団(シンクタンク)
ステンレス ペイント



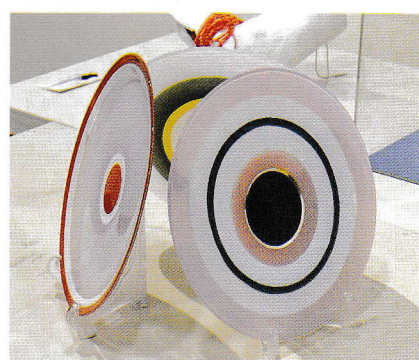
鈴木法明(会員) 思い出
チタン



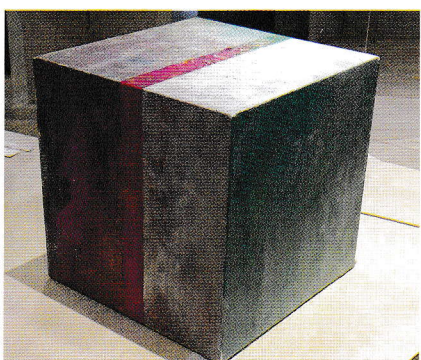
山崎輝子(会員) Seeds は命のタイムカプセル(発芽)
皮革・ワイヤー



熊木真由美(一般) 編まれた箱
ダンボール 染布



川辺彩乃(一般) COLORS
ガラス



松田静心(会員) レインボーシュガーとルビーチョコ
火山灰 アクリル アルキドテンペラ キャンバス
パネル



松田静心(会員) レインボーシュガーとルビーチョコ
火山灰 アクリル アルキドテンペラ キャンバス
パネル



黒木昭衣(一般) 游
絹地 銀糸 色銀糸 綿糸 箔



島田東秋(一般) 金銀彩線花瓶
陶土

最優秀賞を受賞して

漆芸家
日展会友
現代工芸美術家協会本会員
仏像修復師
川口 満



この度BOX展において最優秀賞を頂きありがとうございました。昨年、今年と2回目の出展ですが、普段は2倍から3倍の容積を作品として制作していますので、30センチキューブの空間で、はみ出したらいけない規制の面白さがあり、どのように出し入れの表現をするか、試行錯誤し、大変苦労しました。

題名「記憶の街」は オランダでの日本現代工芸漆芸展の出品で、訪れたアムステルダムとライデンをイメージし、レンガ作りの街とデザイン性に富んだ新しい建物を、漆の基本である、朱色、黒色をベースに新旧が共存し違和感のない都市を意識し、半分は近未来的な空間、あとの半分は昔からの歴史ある建物の空間を見て、心で感じとる都市のイメージ、配色を変えることによって表現した。同じ色でも面が変わることによって別のテーマが顔を出す面白さが立体にはありますから面で違う仕事をしました。角を曲がると違う風景、何時間でも楽しめる歴史ある街、目の高さ

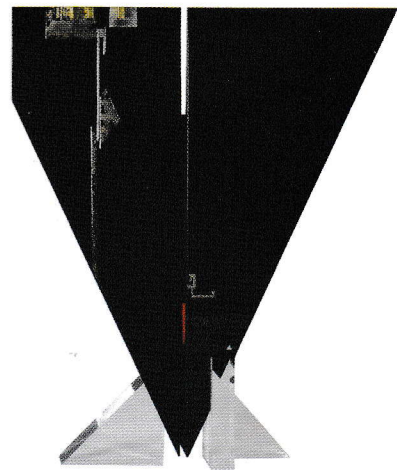
の変化でいろんな意味合いを持つ作品になるよう心掛け、説明しすぎないようにした。普段は春と秋に大きな作品を制作します。記憶がテーマです。記憶は過去のものではなく、知識の層となり、未来に向かい無から有を創出する可能性を秘めた無限の力を有します。過去・知識・創造を表現し、フォルムは逆三角形にして不安定に、アンバランスの中のバランスを求め緊張感ある作品で、朱と黒の対比を感じさせながら複合する立体の魅力が効果的にできることを願って創作しています。BOX展には続きのある作品を表現したいと思います。作品は展示台に乗った時から一人歩きます。皆様に楽しみを感じていただけるように、もの作りをしていきたいです。参加させて頂き、皆様の作品を拝見し、常にテーマにするものは身近な処にあるのに気づかされました。発表できる機会を与えて頂き感謝申し上げます。有難う御座いました。

作品の材質

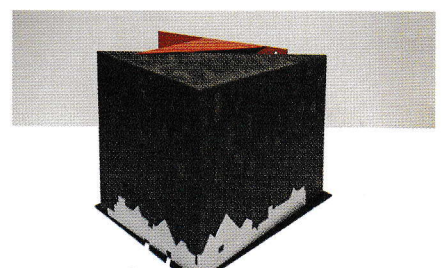
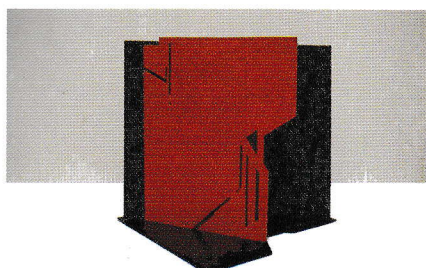
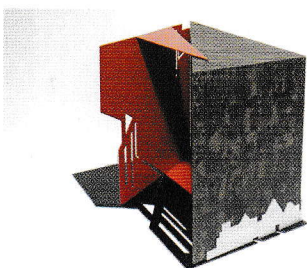
漆、糊 銅板、アルミ板、木、麻布、スズ粉、砥の粉・地の粉

工程は

- ①三角立体は木で漆と糊合わせ布を張ります
- ②砥の粉と漆混ぜ合わせた錆漆を布目摺り
- ③地の粉つけ
- ④切粉つけ
- ⑤砥石で研ぎ
- ⑥錆漆にスズ粉混ぜ文様付けて研ぎ
- ⑦朱の部分は銅板をロウズケ
- ⑧瀬漆を焼き付け
- ⑨朱漆を数回塗り研ぎだし
- ⑩磨き
- ⑪黒の部分はアルミ板で朱と同じ工程です



日展 2018



「記憶の街」

日本の伝統工芸を海外はどう見ているか



株式会社ジャパントーコーポレーション
代表取締役
堀井 素史

日本の伝統工芸の現状は危機的な状態にあるといっています。即ちそのマーケットが著しく減少している。主な理由は、日本の住環境の変化、すなわち日本建築の減少、また高価なものを長く使うより安価なものを流行に応じて買い替えるライフスタイルの変化が大きい。1979年伝統工芸の従業員数が28万8千人、企業数34043社、生産額4836億円であったが、2012年ではそれぞれ6万9635人、13567社、1040億円に減少している。33年間でおよそ5分の1に縮小している、日本の伝統工芸はもはやその市場価値を失ってしまったのか。いやそうではないと私は考えます。日本においてはそうであるかもしれない。しかしグローバルのマーケットにおいては、むしろそのポテンシャルは増している。というのが私の仮説です。

過去9年間海外の設計事務所、デベロッパーに営業してきました。主なターゲットはホテル、高級ブランドの店舗です。日本の伝統工芸はどちらかといえば日用品として対応してきた。そこはコストコンシャスな激戦地で海外特に中国ともろにぶつかる領域です。それを避けるため高価格、高付加価値、高感性の材料で勝負する必要があります、そのターゲットはコントラクトマーケットです。今世界は空前の旅行ブームであり、経済力をつけたアセアンにおいても大きく伸びている、年率34%の伸びを示している。お隣の中国では毎月フォーシーズンズホテル、リッツカールトンがオープンしているといっているほどのラッシュである。ロンドン、シンガポール、香港の約50社の設計事務所・デベロッパーに営業してきました。

2012年ロンドンのフォスター社で「日本の物質文化」のタイトルで社内展示会が開かれ私は招待されました。組子、美濃焼のタイル、西陣織等を展示いたしました。彼らは「日本の物質文化は、伝統的な製造技術によるものであり、職人の技とディテールにこだわる歴史に根差している。」と紹

介されました。シンガポールの Kelly Hill では京都 AMAN に日本のタイル、西陣織を採用していただきました。その採用例から見ると今までの伝統工芸ではなく「コンテンポラリージャパニーズスタイル」(当社のネーミング)に関心を示したというべきと考えます。現代の空間にマッチし、今までになかった感性が彼らの目線にかなったというべきだと思います。いかに海外が日本人と異なる目で日本の工芸を見ているかの例を2つ上げます。まず「畳」われわれは井草の感触とか匂いに畳を意識しますが細い少しゆらぎのある横ストライプが畳なのです。畳柄のカーペット、壁紙が商品化されています。つぎに「金継ぎ」これは金の線の有機的なゆらぎを樹の枝とか樹氷のようだと称しています。また修理したもののほうがオリジナルより美しいと言い切る日本人の感性に驚いて絶賛しています。このように私たちとまったく異なる受け止め方をしているといえます。今後のグローバル展開において重要なキーワードが2つあります。一つは「サステナブル」設計者の提案の趣旨にかならず大きな位置を占める言葉になっています。この分野でも日本の素材は大きな可能性があると思えます。

次に「ブランディング」です。継続的な購買をうながす最重要戦略です。今まで良いものはだまってでも売れると思っていなかったでしょうか。良いものとは顧客に価値を提供できるものです。内容としては品質、デザインそれにそのものの背後の歴史、作り手の想いです。これらの総合が顧客価値なのです。この点の発信力をさらに高めてゆく時、日本の伝統工芸は世界から注文が殺到される商材となると信じます。そのことが日本の伝統工芸を守る唯一の方法です。

「日本の美で世界の空間を豊かにする」このミッションで世界に羽ばたきましょう。



堀井素史氏講演風景



懇親会風景 (堀井素史氏と岡本会長)

第 28 回 AACCA 賞受賞者紹介のつどい開催報告

表彰委員会委員長 可児才介

昨年の第28回 AACCA 賞の選考は、aaca 設立 30 周年記念事業の一環として実施されました。30 周年記念事業として、AACCA 賞の中に「美術工芸賞」を新設、また最終審査を「公開審査」とするという新しい試みが行われました。いずれも AACCA 賞の歴史に 1 ページを加える内容であり、このまま今年以降も継続することが決まっています。今年の「AACCA 賞受賞者紹介のつどい」は、その記念事業の中で選ばれ受賞した作者を紹介する会となりました。

この賞では、毎回すぐれた多くの応募作品が集まり、審査する選考委員会ではいつも難しい判断を迫られます。一般の建築賞や美術賞とは性格を異にしていて、建築家、美術家、工芸家をはじめ様々な分野の個人や団体が連携協力して出来上がったものを表彰するのが大きな特徴です。

毎年秋に審査が行われ、AACCA 賞、優秀賞、奨励賞、特別賞に加えて将来ある有能な新人を表彰する芦原義信賞、また新設された美術工芸賞等の作品が選ばれます。受賞者には 12 月に行われる当協会の設立記念会において賞牌や賞状が授与されます。

2015 年までは受賞者の一部の方には簡単な作品説明の機会がありましたが、受賞作品全体の姿が見えにくく、会員から、受賞者の講演をやってはどうかという意見が多く出されていました。そこで第 26 回 AACCA 賞からは、表彰式での簡単な説明とは別に、独立したイベントにおいて受賞者に作品だけではなく作者の紹介も含めてお話をいただき会員との交流を図る「AACCA 賞受賞者紹介のつどい」を開催することになりました。今年も文化事業委員会と表彰委員会の共催で、サンゲツ品川ショールームをお借りし 2 回

に分けて受賞者の皆様と会員の交流を行いました。

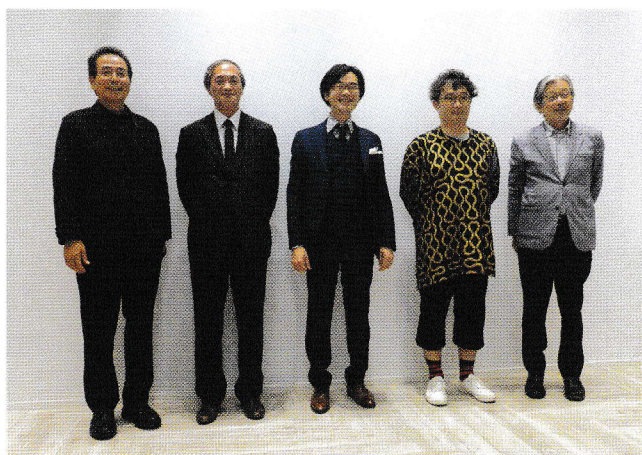
第 1 回は 6 月 17 日夕方に開催しました。最初に芦原義信賞を受賞した加藤詞史さんから、きわめてユニークな構造物の作り方など独創性あふれる作品を紹介していただきました。優秀賞の永池雅人さんグループ、奨励賞の大森晃さんグループからは、作品が出来上がる背景などを含めた興味深いお話をご披露いただきました。今回初めて創られた美術工芸賞を受賞した高橋匡太さんからは光のアーティストとして、目の覚めるような美しい画像を通して、地元の方々と一緒に雪と光のイベントなど、熱のこもった語り口でその思いをお聞かせ頂きました。美術工芸賞ができてよかったと感じる作品でした。

第 2 回は 7 月 9 日に行われました。最初に登場したのは AACCA 賞を受賞した渡邊竜一さんです。建築家が橋をデザインしたという独特のプロジェクトです。ものづくりを追求する迫力を感じさせてくれるお話でした。特別賞の野田隆史さんには、伝統的な伽藍の中の一棟を様々なアーティスト達と共に復元した作品についてお話しいただきました。奨励賞の京谷友也さんからは、般若心経に触れるなど今までにない独特の話題に会場が沸くような素晴らしいお話を聞かせて頂きました。

今年の「つどい」は AACCA 賞とは、という問いに対する回答のような内容でした。登場したみなさんの作品だけではなく、キャラクターからも多くを学び、楽しめました。今年の AACCA 賞の募集もすでに始まっていますが、どんな作品が、作者が出てくるかとても楽しみです。



第1回 AACCA 賞受賞者のつどい



第2回 AACCA 賞受賞者のつどい

展覧会委員会だより

第1回「街に飛び出す作品展」設置作品見学会

展覧会委員会実行委員長 安河内敦子

aaca主催の展覧会企画を通して、会員作家の交流を図り、また一般の参加者を募り、会員の増強、活性化を図る目的で開催された「街に飛び出す作品展」も第5回と回を重ね、広がりを持ってまいりました。

aaca展覧会委員会の活動と作家の思い、設置お買い上げにご協力いただいたオーナー様と成果を共有する目的で見学会を開催しました。

23会場45設置作品の内、第1回見学会では6月6日5会場13作品を参加者9名で見学し、作家を交えて昼食をとりながら懇談会をしました。前日の悪天候に打って変わって好天（良すぎ!）に恵まれ無事見学会を開催することができ

ました。

見学会場

新浦安プロジェクト作家：横山 徹、原 透、大島由紀子、
石井 春、加藤令吉

三郷中央プロジェクト作家：井上勝江、野口真理

おおたかの森プロジェクト作家：鈴木法明

おおたかの森計画A作家：鈴木法明、高須好子

おおたかの森計画B作家：鈴木法明、高須好子

第2回「街に飛び出す作品展」設置作品見学会は9月下旬を予定しています。



おおたかの森ホール広場前 参加者



新浦安プロジェクト作家：横山徹



新浦安プロジェクト作家：加藤令吉



新浦安プロジェクト作家：原透



新浦安プロジェクト作家：大島由紀子



新浦安プロジェクト作家：石井春



新浦安プロジェクト作家：横山徹



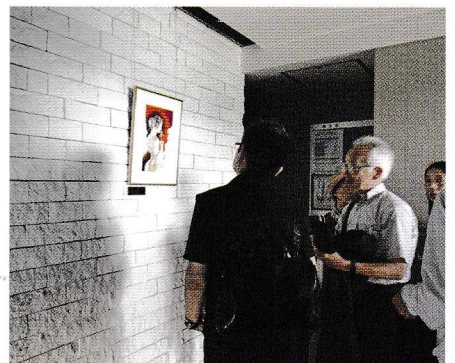
三郷中央プロジェクト作家：野口真理



三郷中央プロジェクト作家：井上勝江



おおたかの森計画 A 作家：鈴木法明



おおたかの森計画 A 作家：高須好子



おおたかの森計画 B 作家：鈴木法明



おおたかの森計画 B 作家：高須好子



おおたかの森プロジェクト作家：鈴木法明

「地域風土に根ざした文化芸術活動」分科会報告

建築家
調査研究委員
七字祐介



調査研究委員会はいくつかの分科会活動を並行して行い、そのうち二つの分科会は活動報告書として2013年、2016年に小冊子を出版した。その内容は調査研究委員会事業報告として協会HP内に採録されているのでご高覧頂きたい。今回の「地域風土に根ざした文化芸術活動」分科会は協会30周年記念講演会を区切りとして、活動を総括する方針である。これまでの当分科会の活動経過については、次号の会報にて詳述する予定である。

30周年記念講演会 調査研究委員会

「地域風土に根ざした文化芸術活動」

「宇都宮」一次の街づくりへのメソッドは

去る3月19日、調査研究委員会は30周年記念事業の一環として「地域に根ざした文化芸術活動」の舞台を北関東で唯一、人口50万を超える中核都市・宇都宮に焦点を当て、「今、宇都宮が面白い!」と銘打った講演会を開催した。講師には宇都宮在住の建築家であり、郷土史の発掘や市民活動に幅広く活躍される藤原宏史氏、建築史家で明治村館長としてF・ライトの旧帝国ホテルの保全に腐心される中川武氏、彫刻家であり、2020年に大谷町で国際野外展を開催される小野寺優元氏、三方によって宇都宮の個性に迫った内容であった。

まず藤原氏によって紹介された、宇都宮の先史時代から古代、中世、近世に至る膨大な歴史資産に目を見張った。近代にあってはF・ライトによる「旧帝国ホテル」以降の大谷石文化を生み、そして現代、市民の声が立ち上げた街中広場オリオンすくえあーを中心に、餃子の街のみならずジャズ文化の街、カクテル倶楽部の街、また自転車のロードレース・ジャパンカップ等のスポーツ文化が息づく。近年には巨大な「火炎太鼓」の復元や二荒山神社の壮麗な例大祭の復活を果たした。「住みやすい街」ランキング（東洋経済社）では宇都宮は過去5年連続、全国第一位であった。5年前に日本創生会議が2040年時、消滅可能都市896都市

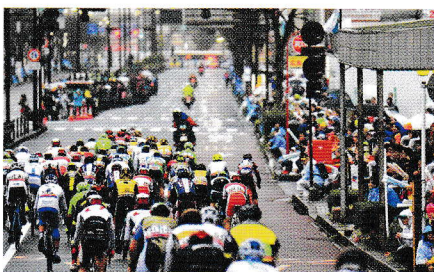
を公表して衝撃が走ったが、宇都宮には人口減少の破綻もない。しかし私達に届く知名度は低く、なぜこう寡黙であるのか。今回はこのミステリアスな街の解剖であった。藤原氏によれば宇都宮は市民による「マニアックな街」であり、“大事なものはしまっておく”らしい。歴史風土に裏付けられた我が街への市民の自信に依拠したものだろう。声高に観光化を叫び交流人口を呼び込む、昨今の街おこしへの婉曲な批判であり、「自分たちの地域に自信を持つよう」の教示であるのだろう。

中川氏は「全体から部分、部分から全体へ」の中で建築史家として法隆寺五重塔を例にとり、各層の軒が見せる、ゆったりとして美しい表情は生駒山原風景に拠ったものであり、古代人の仏教帰依の祈りに応じたものである。つまり「全体」とは自然風土や民俗によって導かれ、発想される骨格（原型）である、「部分」とはその後、歴史によって生じる変更を言い、「部分」は「全体」に有機的に従うものでなければならない。しかし一方、「部分」が「全体」を導く事例として旧帝国ホテルを挙げて自説を展開された。近代は高度な利便性を獲得したがそれは無機質な「個」でしかない。近代都市に置き換えれば機能本位の都市計画は各地で破綻している。市民が集い賑わうオリオン通りは「部分」が「全体」を導いた成功例かも知れない。中川氏が藤原氏へ一言、これからは宇都宮の「全体」を考えてください、と。小野寺氏はサイトスペシフィックアート展を各地でキュレーターされているが、2020年、大谷町を舞台に国際野外展を企画されている。アーティストがその場所固有の情報を解説しアートにする。その感性こそが、宇都宮の未来へ向けて新しい「場」を発信すると語った。

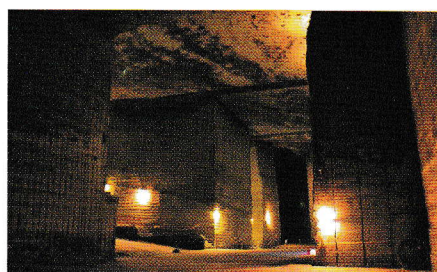
藤原氏が過去から現代に及ぶ宇都宮の地域力を誇り、中川氏は地域力を下敷きにした「全体」と「部分」の創生を語り、小野寺氏はアートによって地域に新しい感性をいかに導くか抱負を語った。過去、現在、未来へ、地域力のあり方に示唆に富む貴重な講演会であった。



H28 菊水祭山車鳥居内奉安



自転車のロードレース・ジャパンカップ



大谷資料館

「宇都宮」マニアックな魅力の発掘と その楽しみ方



建築家
郷土史家
藤原宏史

宇都宮市は人口約52万人の中核市で栃木県の県庁所在地。餃子の街としての知名度は高いが、関東圏以外では何県にあるか知らぬ方も多い。ちなみに栃木県はブランド総合研究所が行う都道府県別魅力度ランキングで、毎年40位台という結果が続いている。また古くから文化不毛の地と県民自ら任じてきた。一方50万以上の28都市を対象とした東洋経済新聞社の「住みよさ」ランキングで2013年から5年連続1位という結果もある。

1.古より宇都宮は関東の都

江戸時代中期の地図考証家、森幸安は「下野州河内郡宇都宮地図」に「宇は宇宙つまり大廣、又卯で東を意味し、都は京と同訓、宮は宮殿の意で、古より宇都宮は関東の都なり」と記している。

その根拠として、縄文時代の大谷寺洞窟遺跡や根古谷台遺跡、古墳時代の笹塚古墳や長岡百穴古墳、宇都宮という名称のルーツであり、源頼朝や徳川家康が深く尊崇した宇都宮二荒山神社、そして約540年に亘り社務職・宇都宮城主として君臨した文武両道の名族宇都宮氏と古より豊かな歴史を持つ。

地形は王都たる四神相応の地相であって、宇陽略記のように“陽”の字が各所に用いられているが、これは京都の“洛”に対応するとも考えられる。気候は典型的な内陸型であるが、温暖化以前は年平均気温が13°Cで北方・南方気候の境界線に当り、両者の動植物が共生し栽培適地でもある。また大谷石で知られる軽石凝灰岩が地盤を形成していることもあり、地震被害は少ない。

2.ルーツは宇都宮

5代城主宇都宮頼綱は出家して蓮生と名乗り、娘が藤原定家の子為家に嫁いだことから、京都嵯峨野の小倉山荘の襖を飾る色紙を定家に依頼し、これが百人一首の起源となった。宇都宮氏は多くの歌人を輩出したことから、京都・鎌倉と並び三歌壇の一つとされる。また与謝蕪村は芭蕉の足跡を追って奥州を旅し、宇都宮の佐藤露鳩宅に逗留して宇都宮歳旦帳を編集して始めて蕪村と名乗った。

スポーツでは江戸時代初期、宇都宮藩士山内主膳の子明石志賀之介が初代横綱として横綱力士碑に名を刻む。宇都宮出身旧制一高のエース青井鋳男は初めての米人チームとの対戦に勝利し第1回野球殿堂入の一人で、野球規則の翻訳やロージンバックを発明するなどその功績は計り知れない。また広島生まれで現在は宇都宮市民の田中茂樹は日本人初のポストンマラソン優勝者。現在でも自転車競技やバスケットボールに先駆的役割を果たしている。その他富岡

製糸場より1年早く我国初の民営器械製糸工場大嶋商會が宇都宮に開業しており、駅弁の起源は宇都宮駅、等数多い。

3.宇都宮はよきところ

林美美子は「宇都宮はよきところきほひと云う宿に志しいこひぬ」の色紙を残す。今も単身赴任者の間で「泣く泣く赴任いやいや離任」が感想で、棟方志功が感銘した版画家川上澄生や童謡作家野口雨情、大谷に発想を得た多彩な木彫刻家丑久保健一、大谷地下空間を異次元空間に変えた舞踏家滑川五郎などは宇都宮が終焉の地となった。また作家向田邦子や映画ポスター作家でジャズ評論家野口久光等は一時期を過ごし、その住居が今も残るアニメ作家宮崎駿やニューオーリンズ名誉市民でジャズトランペッター外山喜雄、直木賞作家門井慶喜も幼少期を過ごして現在も活躍を続ける。勿論故人の作家立松和平、そして現在も活躍する世界的ジャズ奏者渡辺貞夫、チェロ奏者宮田大、ロシア文学者亀山郁夫等地元出身者も数多く存在する。また昨年日本遺産登録された大谷石文化や豊かな竹林は独特の風景であり、宮染め、ふくべ細工などの郷土玩具、山車屋台などの伝統文化、そして上質な食材や左党にはたまらない飲料も隠れた魅力である。

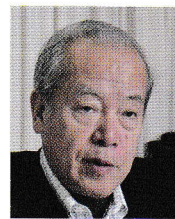
4.宇都宮考

現在宇都宮が標榜する「餃子・ジャズ・カクテル」は明治以来の軍都に由来するが、当初餃子で有名になると市民は誰も思っていなかったし、渡辺貞夫は知っていても日本最古のジャズスポットを始め多くのライブハウスがあり、カクテル名人がいることもごく少数のマニアが知っているだけであった。また残された絵巻をみると江戸時代53台もの山車屋台が繰り出す華麗な祭も近年復活した3台を含め6台が残るのみで、9台が他市町へ譲られ、数台は一部分を残すのみとなっている。大谷石は宇都宮に於いては古くから耐火材料として納屋の瓦や外壁に使われていたが、それが帝国ホテルに使用される程の物とは誰も想像していなかった。

古来宇都宮は東北地方平定の拠点であり、江戸時代には宇都宮吊天井の話が作られ、戦前は戦争遂行の精神を鼓舞する万葉歌碑が建てられて、怖いまち、文化不毛の地と刷り込まれた。だから優れた文化遺産である山車屋台も簡単に手放し、一方一部の人達によりひっそりと守られ続けた文化は残った。

世は観光ブームである。しかし大切なのは、市民が地域の歴史や文化を自覚し誇りをもって暮らせるまち。そんなまちで私は暮らしたい。aaca活動からそうした力を頂けることを願っています。

全体から部分へ、部分から全体へ —建築的価値の志向変容



早稲田大学名誉教授
博物館明治村館長
中川 武

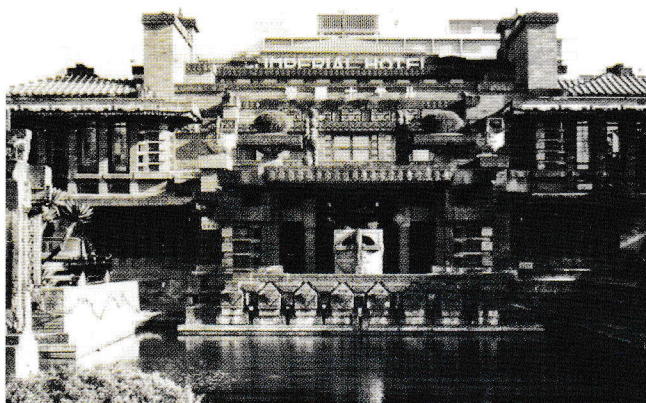
私のバックグラウンドは比較建築史研究です。近年は主にアンコール遺跡などの文化遺産の修復保存の可能性を試みています。日本建築美術工芸協会の皆さんの主題が、パブリック・アート、エコロジーとアート、地域に根差した街づくりのメソッドと幅広く展開されていることを知り、私なりの関心と呼応し合う地点が奈辺にあるのか探ってみたくてやってきました。

当日は藤原さんが宇都宮について話されましたが、私は20年程前に、群馬県の公共施設の幾つかの計画を、出来るだけ自由なコンペで実施してきました。その代表的な例である、東村（現みどり市）立星野富弘美術館について話します。東村出身の星野さんは著名な詩画作家で東村の美しい自然を舞台に小さな作品が多いということもあって、円形展示室の繋がりが特徴です。地元の子供達に強く受け入れられたもので、計画段階からの住民参加が導いた一つの方向性であったかもしれません。星野さんは世界的な作家であり、日光へ行く途中に立ち寄る観光客が多いことも確かでしたが“地域の美術館でありたい”という星野さんの意向でもあるコンセプトを、どのように地域づくりに生かして行くのか、この地域だからこそ可能になるエコミュージアムとエコビレッジの考え方の実践であったと思います。勿論、どんな場合でも考えや思想だけで実行されるわけではありません。しかし考え方が可能性を拓くこともあるのです。

私はこれまで日本、エジプト、アジアの建築が古代において、その社会を統合する力が、有心空間としての建築を生み出したこと、エジプトのピラミッド、ローマのパンテオン、そして法隆寺などを通して建築の全体性の造られ方やその意味を考えてきました。例えば法隆寺金堂の深い軒を支える雲形肘木は生駒の山に懸る夕焼けの雲と呼応したものであって、多くの人々に訴えかけ、彼らのイメージを吸引するもので、それが建築の全体性の意味であった。やがて建築が異質な部分から成ることの体験が建築の中世的世界の形成を促し、そのことがリズムを生み、部材構成に整合性（慈照寺東求堂）や内・外空間の交通（園城寺光浄院）、そして美術・工芸で装飾され、自閉した内部空間（部分としての建築 - 二条城二の丸御殿）を生み出す。建築の部分が確立すれば近世初頭の建築は生産組織の変革と相俟って部分を担う彫刻大工が、つまり文字通り、建築の部分が建築の骨格部を形態としての伝統様式という全体との拮抗から逆にその凌駕へと往還するのである（都久夫須麻神社

本殿)。これはしかし歴史過程の大まかなスケッチに過ぎない。

私が今日、ここに呼ばれたのは宇都宮の大谷石との関連で、明治村にF・ライト作、旧帝国ホテルがあるからだと思う。帝国ホテルの主体構造はRCで、そこにスクラッチタイルや大谷石を貼り付けた、いわば装飾材であり建築の部分に過ぎないと言える。しかしライトの卓抜さは単なる部分ではなく、全体を導く部分になっているところにある。ライトの名作にラーキン・ビル（1903）とS.C. ジョンソン & サン社（1936～39）がある。これは「主」と「従」の空間の構成、そして揺れるRC柱とビーズ管を透過する光によって、つまり近代建築としての部分から主空間に有機的な自然ともいふべき揺蕩う光を醸成している。帝国ホテルは大谷石の選択と「手」の痕跡を残したスクラッチタイルとの両方の陰翳の、複雑かつ連続的構成によって先の二つの作品の各々の特質を保存しながら両者の融合を実現している。その意味でも帝国ホテルのロビーの空間や、失われてしまったピーコックルーム（孔雀の間）等は近代がもたらした高度な生産性と機能性、そして自然感を兼備した豊かな部分が、伝統建築にはない新たな建築の全体性を生成したと言えよう。アンコール遺跡の自然調和の特質は、その風土性と長い伝統の中から培われたもので、アジアの古代文明の中心からやや隔たった亜周辺という地勢故の潜在的価値が結実したものである。近代は高度な利便性を獲得したが、それはどこまで行っても「個」であり「部分」に過ぎない。建築は、そして世界はもう一度、新しい全体性が創成されることを待っている。



旧帝国ホテル

十日町研修旅行記 ～「段十ろう」から「縄文土器」まで

広報委員会委員 三上紀子

梅雨の小雨の降る6月22～23日、広報委員会の研修旅行に参加しました。今回の行先は新潟県十日町市。第28回AACAA賞優秀賞に選出された越後妻有文化ホール・十日町中央公民館～「段十ろう」の視察が主な目的です。

大地の芸術祭の里の中心地、十日町市。「段十ろう」は十日町市の中心市街地活性化の一環で設置された、「芸術・文化」の振興を目的とした“文化ホール”と「生涯学習・社会教育の推進」を目的とした“中央公民館”から成る複合施設です。敷地面積12,586平方メートル、延床面積5,258平方メートルの鉄骨鉄筋コンクリート造2階建ての建物は、多雪地域に対応したなだらかで勾配の美しい傾斜屋根を有し、精緻なディテールと共に落ち着いたある建築です。

平面計画はシンプルで、“文化ホール”と“中央公民館”、そして両者をつなぐ“交流スペース”の3つのスペースで構成されています。

“文化ホール”は、国宝火焰型土器をモチーフに木材をふんだんに使い、木の温もりが感じられる落ち着いた空間が特徴的で、素晴らしい音響空間の贅沢なホールです。ステージの素晴らしさもさることながら、バックヤードの充実ぶりに目が見張ります。大中小4つの楽屋とリハーサル室に加えて、舞台の脇にはアーティストラウンジを備え、出演者が最高のパフォーマンスが行える環境を提供しています。

一方、“中央公民館”は、各講座やサークル活動など市民の日常の活動を支える場で、和室や調理室など各所要室が配置され、外光が溢れる共用スペースでは市民が思い思いに集っています。

そして両者の場所をつなぐ“交流スペース”。だんだんテラスという名称で親しまれている階段状のフリースペースは、十日町の特徴的な地形である市の中央を流れる信濃川が作り出す雄大な河岸段丘をイメージしたという大階段。3.5mの高低さのある計画地の土地形状から生まれたかたちは、階段下のスペースや公民館との講堂とも一体となるつくりで、ミニイベント会場など多様な使い方ができるユニークな場所です。

十日町は現代アートの祭典、大地の芸術祭が開催される都市です。そのため、「段十ろう」にも積極的に現代アートの要素が盛り込まれています。駐車場入り口のモニュメントと大ホールの緞帳（どんちょう）は現代アート作家ジョゼ・デ・ギマランイスの作品。今回緞帳を特別に降ろしていただき、幸運にも全体のデザインを鑑賞することができました。

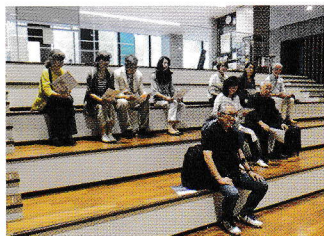
一方、当建築の最大の特徴であるファサード（建物正面）の雁木をモチーフにした全面100mの長さにも及ぶ通路は、照明デザイナー高橋匡太氏とのコラボレーションです。地産の杉材の天井ルーバーとプレキャストコンクリートの列柱の間にLEDが設置され、日が暮れると幻想的な光の演出が楽しめます。その織り重なる光の色彩は、かつて十日町市の主要産業であった織物業へのオマージュでもあるという説明を市の職員の方より伺い、まさに地域に根差したやさしいアートであることを再認識しました。

エントランスの脇には、ガラス張りの回廊の市民ギャラリーもあり、建物の随所に作り手の工夫とアイデアそして芸術性が空間のかたちとして昇華し、それが市民活動の多様性に丁寧に対応していることに深く感心しました。きっとこれからも末永く、“まち”と“ひと”を“芸術・文化”でつなぐ理想的な空間として、市民に愛される場になるであろうことを予感した見学会でした。

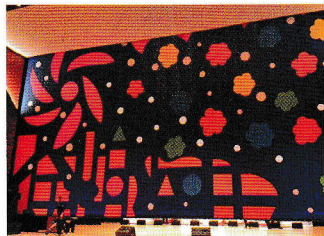
翌日は、火焰型土器を鑑賞するために十日町立博物館を訪ねました。十日町市は縄文遺跡が多く出土している地域です。国内出土の火焰型土器で国宝指定第一号の「縄文雪炎（じょうもんゆきほむら）」も展示されていました。縄文人の美意識とその存在感に参加者一同圧倒された後は、十日町の現代美術の中心－越後妻有里山現代美術館キナーレへ。さらに地元十日町名物のへぎ蕎麦を食し、いざ帰路へ。駆け足でしたが、十二分に十日町を堪能したアートの旅となりました。



越後妻有文化ホール



交流ホールのだんだんテラス



大ホールの緞帳



大ホール客席

広報委員会だより

会報 83号 P6 < 2019・20年度 協会役員の紹介 > に理事氏名が欠落しておりました。

ご本人・関係者皆様にお詫びいたします。

理事 和出知明 (株) 梓設計 常務取締役

事務局だより

■新入会員・会員の異動 2019年7月～2019年9月(敬称略)

個人情報保護法により、個人会員は氏名・活動分野、法人会員は会社名、所属部署、代表者氏名・担当者氏名、会社住所、電話のみ掲載いたします。

《新入会員》

個人会員	櫻井ちると(建築画報社)、永井ゆきお(工芸家)		
法人会員	(株) 遠藤照明	代表取締役社長 遠藤邦彦 担当 建築環境 ソリューション部 加藤菜摘	〒160-0011 新宿区若葉 1-4-1 TEL 03-5369-7157

《会員の異動》

法人会員	(株) 梓設計	住所変更	8/19より 〒114-0042 大田区羽田旭町 10-11 三井不動産インダストリアルパーク (MFIP 羽田) 3F TEL 03-5735-3210 (企画代表)
	(株) 久米設計	代表者変更	代表取締役社長 藤澤 進 (前 代表取締役会長 山田幸雄)

■協会開催事業のご案内

第14回 aaca 金沢・福井・滋賀地区建物視察会 — 話題の最新作と越前和紙の里を訪ねる —	2019年11月15日(金)～16日(土)
令和元年設立総会のご案内	2019年12月11日(水) 15:00～17:00(予定) 設立総会 18:00～19:30(予定) 懇親交流会 建築会館一階ホール
2019 景観シンポジウム 「場の力で多様な価値を繋ぐ 早稲田アリーナの事例を通じて」	2019年12月17日(火) 15:00～17:30 シンポジウム(開場14:30) 18:00～20:00 懇親会 早稲田大学 27号館 小野記念講堂

編集後記

会報の表紙は、84号(夏号)から「街に飛び出す作品展」の推薦作品で構成しました。今回の85号(秋号)では「第2回街に飛び出す作品展」の推薦作品となった素晴らしい作品が表紙を飾っていますが、この「街に飛び出す作品展」は、昨年第5回を迎えました。毎回、多くの素晴らしい作品のご応募をいただいています。この表紙をご覧になった多くの方々からのご応募をお待ちしております。

会報では、毎回会員の皆様から原稿をお寄せいただいておりますが、本号でも中野恵美子様からは、素晴らしい出会いのお話、三上紀子様、高須好子様、鍛治加緒里様、山崎和子様からは、それぞれの分野でのご活動、ご活躍などをご披露いただくなど、「会員活動レポート」では初めて知る世界、制作活動の奥深さなど毎回興味深いレポートをいただいております。会員の皆様には、是非懐かしい思い出、素晴らしい出会いなどご披露いただき、会員の皆様の良い記録にしていだければと思います。

協会では、様々な事業を開催しておりますが、それらは多くの出会いの場ともなっております。12月には、協会の設立総会が開催され、総会後の懇親会では、和やかな雰囲気の中で、会員の皆様に楽しいひと時をお過ごしいただいております。会員の皆様には協会の開催事業にご参加いただき、楽しい出会いの場としていただければと思います。そして会報へのご投稿をお待ちしております。

 2019.10 no.85

発行人 会長 岡本 賢
発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
委員長 飯田郷介
会報担当副委員長 野口真理
会報編集委員 五十嵐通代 石田真人 置鮎早智枝
竹生田 正 田島一宏 中村弘子
松本治子 三上紀子 山崎和子
山崎輝子 山下治子 吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション